

「レジャー」や「レクリエーション」という語は文字面から判断すると、自分や社会の維持のための「仕事」に派生して生まれた言葉だ。前者はそのオフの状況、後者はその疲れを回復する活動を指している。本来、遊びが仕事であった子どもには無縁の言葉だが、昨今の教育事情で子どもにもニーズがあるらしい。「課せられたコト」からの解放が言葉の中核にある。

一方「地域文化」はその気候、風土、歴史などを反映した地域独自の文化を指し、土地の風俗習慣、祭り、遊びなど、生活に根ざす多様な事象を対象とするが、地域経済や産業に直結する事象も含んでいる。ここではそれが「課せられたか否か」は不問に付され、諸事象の相互関係が織りなすハーモニーが重視される。

今日の地域文化の課題は、情報化、国際化が進むなかで、地域独自の文化の喪失をいかに食い止めるかにある。興味をそそる新たな文化事象が情報の波に乗って世界中から飛来し、その新奇さで地域の伝承文化の影を薄くしている。独自性の重要性は大方の支持を得ているものの、世界経済の波のなかで、限られた地域の経済循環のなかで成立していた細やかな文化活動は経済的に危機に瀕している。それを守る新たな経済環境の構築が求められている。

私は 28 年前、近所の人たちと世田谷で子どもの自由な活動を許容する「冒険遊び場」の運営を始めた。都市化に伴い地域の子どもの社会が瓦解し、伝承されてきた子ども文化が危機に瀕しているとの思いからだった。やがて区の協力を得、大勢の区民の手で今も継承され、区内に羽根木プレーパークをはじめ 4ヶ所の冒険遊び場が運営されている。この 9 月には NPO 法人「日本冒険遊び場づくり協会」が設立され、全国に広がりを見せている。

私が冒険遊び場を知ったのはレディ・アレンの「都市の遊び場」を通してだったが、世界最初の「エンドラップ」がコペンハーゲンにつくられて今年で 60 年になる。地域文化の維持については、この間の地域の取り組みに学ぶべき点が少なくない。

レジャー、レクリエーションの分野では、スポーツやゲームのようにルールに基づき世界中で楽しめる普遍的なものと、特定の場所等がその活動の中核をなすものがある。また伝承することに意味があるものと、時代のニーズに応じて新たに創られるものがある。仙台の定禅寺通りは、特色ある場所性により多くの活動の場となっている。青葉まつりの他にも、定禅寺ジャズフェスティバル、光のページェントなど、新企画が興り、新たな地域文化を創りだしている。

これらのイベントは大勢のボランティアの手で維持されている。経済活動としての「仕事」とは異なる、自分や地域の暮らしを「楽しい」ものにする労働が、地域文化を担っている。レジャーやレクリエーションを通して地域活動の活性化を促し、「楽しさ」をベースに、地域文化の担い手を育て、地域文化そのものを拡大再生産するプロジェクトに取り組む必要がある。